

はじめるこころ

Vol.61

TEL:072-724-6921

E-mail

edujiinken@maple.city.minoh.lg.jp

令和8年(2026年)3月

まいにち学校 街の中 子どもの笑顔につなげる

この情報紙は、就学前施設・小中学校・小中一貫校の保護者をはじめ、広く市民のみなさんに、身近な人権教育の話題を知っていただくため、市民参加方式で編集したものです。

ご家庭でお子さんと、あるいはご近所や職場の方と、こうした話題にふれて語り合っていたいただければと思います。

なお、電子媒体でお読みいただきやすいように、今回からこれまでの書式を変更し、横書きとしております。

もくじ

■市内で取り組まれている人権教育について
(豊川北小学校・豊川南小学校)

1

■学校図書館司書のコーナー

子どもたちからパワーをもらう読み語り

7

■東小学校

いのちの授業 ～生まれてきてくれてありがとう～

5

■編集後記

8

豊川北小学校・豊川南小学校

市内で取り組まれている人権教育について

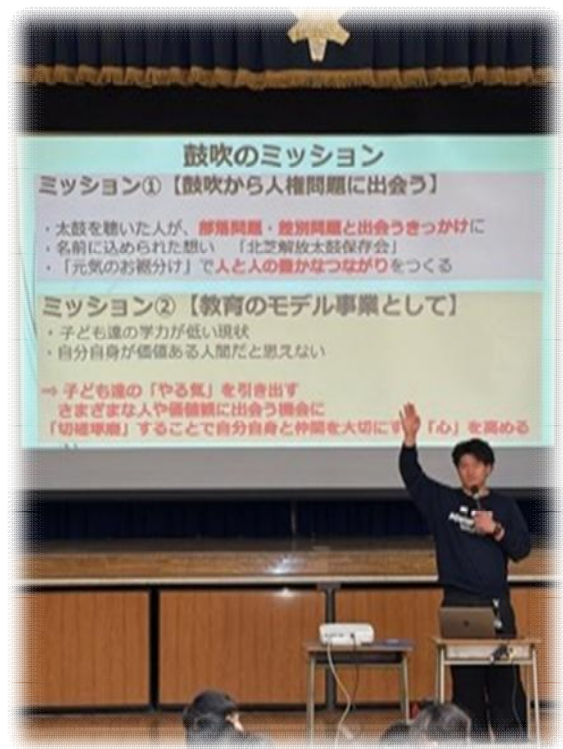
現在、市内の学校園所においてはさまざまなかたちで人権教育に取り組まれています。そもそも「人権教育」という教科はありませんので、時間割には「人権教育」という表示はありませんし教科書もありません。そもそも人権教育って、どんなことを学ぶのかということについても、人によってイメージがちがうことも少なくないと思います。

【すべての人に保障されている人権】が守られていない状況に対して、「自分とは関係のないことだから…」と看過するのではなく、そのことのおかしさや不合理な状況を解消していくためのみちすじなどについて子どもたちとともに考えていくことが重要です。そうしたことを意識しながら、人権が保障される社会の実現をめざすために取り組まれた小学校での授業を紹介します。

■特定非営利活動法人 暮らしづくりネットワーク北芝 との協働授業

人権教育のとりくみをつくっていくときに、教職員だけでプランを考えていくことも少なくないですが、場合によってはゲストティーチャーとして子どもたちや保護者の方々に講演をしていただいたり、体験学習をとおして学んだりすることもあります。ただゲストティーチャーに来ていただいてお話を聞く、一緒に体験するといったことだけにとどまるのではなく、学校側がねらいをもって前後のとりくみをコーディネートしていくことが重要です。

そうしたことも意識しながら、特定非営利活動法人 暮らしづくりネットワーク北芝（以下：暮らしづくりネットワーク北芝）との協働で授業をつくっていくことに取り組んできた市内小中学校・一貫校の中から、2校に実際に授業を観させていただきました。2校ともに、学校のご厚意で箕面市人権教育推進会議の委員の方々にも参観いただくことができました。



箕面市では、主に暮らしづくりネットワーク北芝との協働での授業を検討している小中学校を対象に、夏季休業中に部落問題学習会という研修を開催しています。今年度は30名ほどの先生たちと一緒に部落問題のことについて考え、どういったことを子どもたちと一緒に考えていく必要があるだろうかということを考えました。今回、取材させていただいた2校のほかにも、多くの学校で協働での授業がひろがってきています。

豊川北小学校 6年生

差別やいじめなどについて考えるとりくみとして、暮らしづくりネットワーク北芝の人たちとの出会いをとおして差別が今もあるということや、解決していく主体者は自分たち一人ひとりであるということを学ぶことをねらいにしたとのことでした。

北芝開放太鼓保存会「鼓吹」の人たちからは、はじめに太鼓の演奏があり、体育館ということもあって迫力のある太鼓の演奏に子どもたちは圧倒されていたようでした。続いて、太鼓の歴史やつくり方の話の

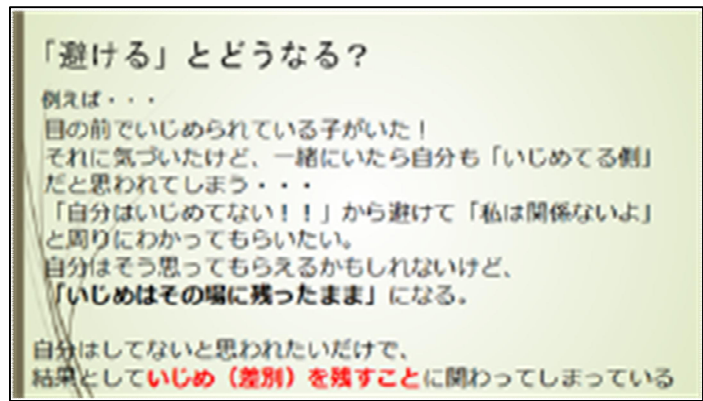


【豊川北小での授業の様子】

中で、太鼓の皮は牛の皮（割合は少ないですが馬の皮も使われることもあるそうです）が使われていることで、それらを取り扱う人たちは差別の対象になってきたことも話されていました。

差別やいじめがよくないことというのは、世の中のほとんどの人は知っているのに、なぜなくなるのか？ということ子どもたちに問いかける場面もありました。

その場ですぐに答えが出るわけではないけれども、そうしたことを考えていくことが差別やいじめをなくしていくことにもつながっていくのではないかといたことも話されていました。



【講演スライドより】

■子どもたちの感想より

・太鼓の演奏を聴いて、とてもはく力があってすごいと思いました。お話を聞いて「死」に関係する仕事をしている人が差別されていたことを初めて知りました。そして「平等」と「公正」は少し違うということも知ることができました。これからはもし差別やいじめなどを見たら、鼓吹のみなさんが話してくれたとおり、立ち止まって考えてみようと思います。

・平等だけではなくて公正というのも考えないといけないと思いました。いじめの場から避けるのではなくて止まって「考える」というのが大事とわかりました。差別を減らすために一つひとつの行動に責任を持つことが大切だと思いました。

■参観された箕面市人権教育推進会議委員さんより

北芝解放太鼓保存会「鼓吹」の3人の演奏が始まると視線は演奏者のバチに集まりました。演奏が終わると大きな拍手が起こります。

「太鼓の皮は何でできている？」「鹿、馬、牛、いのしし？」

「太鼓を演奏する人は大きな拍手をもらうのに、太鼓をつくった人は死んだ動物を扱うのは汚らわしいと差別される、おかしくない？」という問いかけにじっと耳を傾け考えている子どもたちの様子が見られました。そんな視点で問いかけられたことは初めてだと思います。「私たちは太鼓を通して『差別はおかしい』と訴えています。」「私たちがめざしているのは人と人とが豊かな関係をつくることです」と話が続けました。

また「『差別はダメ』と誰もがわかっているのになぜ続くのか？誰かが悪いけれど、自分ではない。差別していると思われたくないから避ける。知らんぷりをする。だから差別は残る。いやな思いをする人がいる。いじめも同じ。避けている人は差別したりいじめたりすることに関わっている。差別やいじめを残す行動をしていること。『遠い・関係ない』という無関心ではなく『なんで？おかしいやん』と考える人になってほしい、もし差別に気づいたら無理に言わなくてもいい。立ち止まって考えてほ

しい、みんなに出来ること、そして自分のできることで行動してほしい。」と、子どもたちにもわかりやすい言葉で語り掛けておられました。(箕面市人権教育推進会議委員)

豊川南小学校 3年生

当初は「みんなちがってみんないい」ということを人権総合学習のテーマにしていたのですが、今回の授業についての打ち合わせのなかで「『みんないい』としてしまうことで、ちがっていることやそのちがいによってしんどい思いをしている人たちのことに対しての無関心を生み出すことにならないか」という指摘を受け、学年の教職員で再考する機会をつくったそうです。

ちがうことによって生み出されるしんどさや生きづらさを知り、その不合理さについて考えることで、そうした状況を解消していくには自分たちにはどんなことができるだろうかと、具体的に行動していく力を積み上げていくということが新たに人権総合学習の目標になったそうです。



【豊川南小での授業の様子】

■子どもたちの感想より

・私は今まで人のことを大切にしようということ
は少ししかできていませんでした。なので私は
人のことを大切にしようと思いました。

・差別と区別の話を知ったら差別はダメなことだと思ったので、友だちを仲間はずれにしないように気をつけたいと思いました。太鼓の演奏がすごかったので、いつかは太鼓を演奏してみたいと思いました。

・私は太鼓ひとつから差別や区別のお話など、人権のことが考えられることを初めて知りました。それでいろんなことを知れたのがうれしかったです。特に心に残ったのは、差別の問題です。その話で命を扱う仕事を「こわい」などといじめてはいけないことが分かりました。

■6年生・3年生のどちらの授業も参観された箕面市人権教育推進会議委員さんより

箕面市の副読本「わたしたちのみのお」に触れ、子どもたちの興味を引き付けた後、「らいとぴあ21(箕面市立萱野中央人権文化センター)で仕事をしながら、太鼓をたたいています。らいとぴあは小中校生、大人も話したり、相談したり、遊んだりできる居場所です」とらいとぴあの紹介をしていただいたことで、副読本に書かれていることがグッと身近になったように感じました。

教職員へのメッセージも併せて、「これからもいい出会いから人と人のつながり(人間関係)を考える、困っている人のために何が出来るのかを考えてほしい。正しいことをきちんと教えてもらって

くださいね」とまとめられました。

学年は違いましたが、太鼓の演奏を通して、「差別の不合理さを知る」「『それっておかしいな!』と気づいたら立ち止まって考える。そして自分のできる行動をしてみる」ことが大切であること。「差別の問題は他人ごとではなく自分ごとである」ということに迫る授業でした。子どもたちは和太鼓の響きとともに、今日のいい出会いはきっと忘れないことでしょう。

わたしたちも様々な人権課題について学び続けること、学び直すことを忘れず、子どもたちと一緒に「差別のない社会づくり」をめざしたいと思いを新たに作る時間でした。

(箕面市人権教育推進会議委員)

東小学校

いのちの授業 ～生まれてきてくれてありがとう～



箕面市の学校園所では子どもたちの状況に応じて、からだのことやこころのこと、いのちのことなどを考える性教育に取り組んでいます。今回は小学校でどんな形でからだのことやこころのこと、いのちのことなどについて学んでいるのか、東小学校で実際に取り組まれた授業についてお聞きしました。

■東小学校で取り組んでいること

毎年、1学期の水泳指導前の時期には全学年にプライベートゾーンの話をしします。毎年繰り返すことで、少しずつ子どもたちも意識することができるようになってきていると感じます。5年生、6年生の宿泊学習の前には身体の変化や初経、精通についての話をしします。プライベートゾーンのことについて話をするときには、(※)バウンダリー(境界線)のことについて考えることも組み込んだ授業をしています。

こうした学習を保健指導という枠組みを超えて、人権教育としても位置づけることを大切にしています。そのことで、養護教諭だけが取り組むというのではなく、学年団の先生たちと相談しながらとりくみにつなげていくことができると思っています。

(※)バウンダリー(Boundary)

自分と他者を区別する心理的・身体的な「境界線」のこと。感情、時間、身体、所有物などにおいて「ここから先は入ってほしくない」という線引きを意識し、互いの領域を尊重することで、健康な人間関係と自己のメンタルヘルスを保つための概念です。(AIによる概要)



【5年生での授業の様子】

■助産師さんによる「いのちの授業」

「むすび助産院」の田中さんにお越しいただき「生まれてきてくれて、ありがとう」をテーマにお話をさせていただきました。2年生と5年生で、基本的には同じ内容についてですが、学年に応じて5年生は少し詳しい内容について話していただきました。

命のはじまりの大きさや妊娠中の母親の気持ち、出産の様子や周囲の支えなどについてお話いただき、妊婦体験や誕生の瞬間の音声も聴かせていただきました。

2年生でも5年生でも、子どもたちの関心の高さを反映するように、とても真剣な様子でお話を聞いていました。

2年生では、産道体験をしました。産道に見立てたものをくぐり抜けると、みんなから「おめでとう!!」と言ってもらいます。少し恥ずかしそうにしていた子どもたちも、みんなからの「おめでとう!!」の声にとっても嬉しそうな表情になっていました。

「みんなママから生まれてきたときにも、こうやってみんなから『おめでとう!!』って言ってもらったんだよ。」という田中さんの言葉を聞く子どもたちの表情は、どこか嬉しそうな様子でした。



【2年生での授業の様子】

■5年生の子どもたちのふりかえりに書かれていた田中さんへの質問(※一部抜粋)

- ・助産師が減っていると聞きます。大変なことはありますか？
 - ・助産師は(帝王切開などの)手術はできますか？
 - ・なぜ助産院を開業したのですか？
 - ・妊娠したら生理は来ませんか？
 - ・つわりはなぜ起こるのですか？
 - ・予定日はどうやって決まりますか？
 - ・生まれてくる痛さは100のうちどれくらいですか？
 - ・家で出産するときにはどのようにしますか？何かを持ったりしますか？
 - ・生まれた直後に泣くのはなぜですか？
 - ・へその緒を切ったら血が出ますか？痛くないですか？
- など

■授業を終えて

助産師の田中さんのお話を聞く子どもたちの、キラキラとした瞳がとても印象的でした。特に2年生の産道体験では、照れながらも祝福の声を浴びて誇らしげな姿に、自分という存在がどれほど大切に迎えられたのかを肌で感じてくれたのではないかと思います。また5年生からのこうした質問から「知りたい」というまっすぐな気持ちに、私たちおとなが誠実に応えていく責任を改めて実感しました。継続的に取り組むことで学校生活全体を通じて「自分や他人を大切にする」メッセージを届けていきたいと考えています。また今回の授業をきっかけに、学校で学んだことを家庭でも話し合えるような、温かな循環をつくっていきたいです。



【授業のスライドより】

また5年生からのこうした質問から「知りたい」というまっすぐな気持ちに、私たちおとなが誠実に応えていく責任を改めて実感しました。継続的に取り組むことで学校生活全体を通じて「自分や他人を大切にする」メッセージを届けていきたいと考えています。また今回の授業をきっかけに、学校で学んだことを家庭でも話し合えるような、温かな循環をつくっていきたいです。

(東小 養護教諭)

学校図書館司書のコーナー

子どもたちからパワーをもらう読み語り



小学校では週に1時間、図書館で行う国語の授業、いわゆる「図書の日」があります。この時間では読書活動への支援として、司書から本の紹介をしたり、絵本の読み語りをしたりしています。読み語りをしていると、子どもたちから様々なつぶやきが聞こえてきます。

『あばれネコ』（キューライス／さく・え KADOKAWA 2020年）では、カーテンにぶら下がるネコを見て「おかあさんがマジギレするやつやん」とボソッと一言。『きまぐれレストラン』（宮野聡子／作・絵 金の星社 2023年）では、うっかりみんなの料理を食べてしまったハシビロコウに「ハシビロコウさん、みんなに謝ってない！」と憤る子も。確かに、謝っている場面はないのです。おかしいやら、感心するやら、読んでいるこちらが楽しませてもらうこともしばしばです。

読み語りを選ぶ絵本は、時代を超えて読み継がれているものや、風刺が効いたもの、いじめを扱ったものなどもあります。昔に出版されたものは時に、体罰やジェンダーのとらえ方などが今の時代にそぐわないものもあります。例えば『いつもちこくのおとこのこ ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー』（ジョン・バーニング／さく たにかわしゅんたろう／やく あかね書房 1988年）では、主人公のジョンがいつも突拍子もない理由で学校に遅刻します。ジョンに対する先生の怒り方といったら！ 聞いている子どもたちはあっという間にジョンの味方です。そして最後のオチを聞いた時のスッキリとした顔がたまりません。

また『かんぺきなこども』（ミカエル・エスコフィエ／作 マチュー・モデ／絵 石津ちひろ／訳 ポプラ社 2019年）は、こどもがスーパーマーケットで売られているところから始まります。「え?! あかんやん」というつぶやきがあちこちから聞こえてきます。刺激的な表現の絵本を読んでも、子どもたちから聞こえてくる「それはあかん」「ちがうやろ」というつぶやきから、思いやりや正義感を感じます。時には誰かを傷つけるようなつぶやきも聞こえてくることもありますが、読み語りを止めて注意はしません。お話を最後まで楽しんで、作者の意図を感じてほしいという思いと、一緒に聞いている担任の先生が必ずその発言に気づき、適切な対応をしてくれるからです。

読み語りを通して子どもたちが、人も自分も大切にしたい気持ちを育んでくれているのだと実感します。絵本を読みながら、私も子どもたちから心のエネルギーをもらっています。

編集後記

今回は暮らしづくりネットワーク北芝の方々や助産師の方と学校とが協働で授業をつくっていったとりくみを紹介させていただきました。単なるゲストティーチャーとして内容をお任せするのではなく、ゲストティーチャーのお力をお借りしながらも、どんな授業をつくっていく必要があるのか、どんなことをめざした授業にするのかといったことを話しあいながら、協働でとりくみを積み上げていくといったことが、あちこちの教育現場で取り組まれています。

子どもたちがどんなことに会うことをめざすのか。場所や文化と出会うこともあるでしょうし、そこに住む人たちの暮らしに出会うことだってあります。そこで暮らす人たちの想いや生き方に出会うことで、子どもたちの価値観や考えが大きく揺さぶられることもあります。

これからもたくさんの出会いを地域と学校とが協働でつくっていくとりくみを取材していきます。

「はじけるころ」では、様々な取り組みをご紹介させていただいております。ご一読いただき、感想や意見をご家族や身近な人と交わされること、また、その中で皆様方の関係性が更に育まれること、「はじけるころ」がその一助となることを編集委員一同願っております。また、61号発行に際しましては執筆や編集等に多くの方々にご協力いただきましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「はじけるころ vol.61」はいかがでしたか？

みなさんのご意見・ご感想をお聞かせください。以下の①～④の内容を、郵送、ファクスまたはEメールにてお送りください。これからも人権教育に関心をもっていただける記事を掲載したいと思っておりますので、ぜひともお言葉をいただけることを編集委員一同お待ちしております。

- ①お名前(無記名でも構いません)
- ②ご意見・ご感想
- ③「はじけるころ」の入手方法
- ④ご意見・ご感想掲載の可否について



〒562-0003 箕面市西小路 4-6-1 箕面市教育委員会人権施策室

TEL : 072-724-6921 FAX : 072-724-6010
Email: edujinken@maple.city.minoh.lg.jp